

中日新聞「リンクト」
LINKED
plus+
シアワセを
つなぐ**仕事**

試練と挑戦の数だけ
大きく成長できる。

市田啓佑

初期研修医

大垣市民病院

企画制作○中日新聞広告局 編集○プロジェクトリンクト事務局



チャンスが人を育てる。 圧倒的な症例数が、 百戦錬磨の力を鍛える。

「この病院を選んで本当に良かったと思います」。
ハードな環境で知られる大垣市民病院に飛び込んで2年。
確かな手応えを口にする初期研修医(※)の市田啓佑医師の姿から、
ハイレベルな医師を育てる同院の教育現場に迫った。

※ 大学を卒業後、国家試験に合格した医師は、臨床現場で研修(臨床研修)をし、基礎的な診療能力を養う。臨床研修には、初期研修(卒後1〜2年目…必修)と後期研修(卒後3〜5年目)がある。

多様な症例に触れ、
多くの手技をこなし、
大きな自信を培った2年間。

01

2年前、研修医として歩み始めた市田啓佑が、はじめて「自分は医師になったんだ」と実感したのは、救急外来での診察だったという。「腕が痛い」と泣き叫ぶ子どもと不安そうな母親。診察すると、子どもに多い亜脱臼の一つ、肘内障(ちゅうないしょう)だった。「この病気は、肘をひねることで簡単に治せるので、お子さんもケロッと泣き止みました。患者さんを治し、感謝される喜びをかみしめた瞬間です」。そうした軽い疾患から重い疾患まで、市田はこ

の2年間で救急外来や各診療科を回って、実にさまざまな症例を経験してきた。「症例数が多いのは、大垣市民病院の最大の魅力です。しかも、単に数をこなすだけではありません。救急をはじめ各診療科の先生の講義をちゃんと受けながら、多くの疾患を経験できる

ので、すごく勉強になります」。外科の手技においても、切り傷の縫合から腹腔鏡手術(お腹に小さな孔をつけて管を入れ、小型カメラを挿入して行う手術)まで、幅広く携わってきた。「この手技をやらせてください」と指導医の先生に申し出れば、たいていは、へ俺がつ



COLUMN

● 大垣市民病院では、初期研修だけでなく、後期研修のプログラムの充実にも力を注いでいる。「当院は医師の育成を、初期と後期研修を含めた5年間で考えています。最初の2年間で基本的な診療能力を身につけ、その後の3年間で専門性に磨きをかける。当院で5年間学べば、どこに出ても通用する医師になれると思います」と研修管理委員会副委員長の前田敦行(外科部長)は自信をのぞかせる。

● さらに後期研修では、平成30年度から、内科、外科、麻酔科の3領域で新しい専門医制度での研修を開始する。専門医の資格を取るには、一定の症例数の経験が定められているが、症例数が豊富で稀少疾患も経験できる同院では、早い段階で必要な症例数を確保できる。そのため、基本領域はもちろん、その先のサブスペシャリティ領域を含め、将来を見据え、着実にステップアップできるといえるだろう。

「いてやるから、やってみろ」と言ってもらえます。すごくありがたいですね」と市田は話す。

また、地域の基幹病院である同院は、症例数が多いだけでなく、稀な疾患も多い。「たとえば、背中の脊髄の外側に血の塊ができる（脊髄硬膜外血腫）という病気は、救急で年に1回診るかどうかという病気ですが、僕は1年間で2回診ました。腰の痛みを訴えて来られたので最初は迷いましたが、上の先生に助けてもらい、正しく診断して緊急手術に繋げることができました」。

さまざまな試練に挑み、加速度的に成長を続ける市田。しかし、それほど症例数が多いということは、日々多忙を極めるのではないだろうか。「確かに夜間の緊急手術で呼び出されることも結構ありますが、あまり苦になりません。僕がサポートすることでチーム医療が円滑に回り、手術がうまくいけば、患者さんのためになると考えています」。市田がもともとこの病院を選んだのも、「最初のうちにハードな環境で揉まれる方が、腕を磨ける」と思ったから。「失敗して悔しい思いをすることもあります、とにかく自分で体を動かして、自分で考えるという体育会系の風土が、僕には合っていますね」と笑みを浮かべる。



研修2年目、先輩ができたとき、厳しく指導し、叱ってくれた。ありがたさを初めて知った。「叱るのつて、すごく体力がいるんです。先輩たちがいかに研修医のことを思い、指導してくれているのかを、実感しました」（市田）。



02
 トップレベルの医師を
 地域に送り出したい。
 指導医の情熱が研修医を鼓舞する。



大垣市民病院は、市田をはじめとする研修医たちに対し、1年目から多くのチャンスを与えている。だからこそ、個々の研修医に要求するレベルも高く、厳しい叱責の音が飛ぶことも少なくない。その空気感は、ともすれば、優しい組織風土を好む現代の若者の志向と、逆行しているようにも見える。「それでも、私たちはスタンスを変えるつもりはありません」。そうきつぱり語るの

は、研修管理委員会副委員長の前田敦行（外科部長）だ。「私たちはただ、平均的な臨床医を育てるつもりはないんです。目標は、その分野でトップレベルの実力を備えた医師を育てること。地域医療の質の向上に貢献できるように、一流の医師の育成をめざしています」。その目線の高さと熱意あふれる指導があるからだろう、初期研修の後、後期も同院に残って学ぶ研修医が多い。市田もその一人だ。今春から、同院の産婦人科へ進み、後期研修をスタートさせる。どうして産婦人科を志望したのか。「以前は、出産って安全なのが当

たり前と思っていました。診療の現場に触れ、命の危険に及ぶ場面が多いことを知りました。産婦人科の場合、母親と子ども、どちらか片方を助ければいいというわけにはいきません。二つの命を救うところに大きな魅力を感じました。それに、慢性的な医師不足の産婦人科で、自分が少しでも役に立ちたいという思いもあります」。すでにこの2年

BACK STAGE

一流を育てたい指導医と、一流をめざす研修医と。

●約37万人の人口を抱える西濃医療圏の

基幹病院として、地域医療の皆の役割を果たしている大垣市民病院。圧倒的な数の症例に触れ、医師の基礎を徹底的にたたき込まれる同院の初期研修は、大垣大学、とも評され、厳しさは群を抜いている。その根底にあるのは、「一流の医師を育てたい」という指導医の情熱。そして、同院を選ぶのは、「あえて厳しい環境で自分を

間で、卵巣腫瘍に対する手術など、難易度の高い手技も経験してきた。そうした症例を論文にまとめ、学会でも積極的に発表していく計画だ。「あと3年間で、産婦人科の診療は一通りできる医師になりたいですね。この病院なら、そのくらいの症例数は経験できると思いますから、楽しみにしています」。市田は明るい口調で、抱負を語った。

追い込み、一流の医師になりたい」という意欲あふれる研修医たち。両者の目的が合致しているからこそ、確かな教育の成果を上げているといえるだろう。

●古いことわざに『若いときの苦労は買ってでもせよ』という教えがある。若い頃の苦労は自分を鍛え、成長に繋がるから、求めてでもするほうがよいという意味だ。同院を選び、日々鍛錬している研修医たちはまさに、そんな昔の教えを実践している最中だ。その苦労が将来、どんな花を咲かせるのか、成長を期待して見守っていききたい。

企画制作
 中日新聞広告局
 編集協力
 大垣市民病院
 〒503-8502
 岐阜県大垣市南頼町4-86
 TEL 0584-81-3341(代表)
 FAX 0584-75-5715
 http://www.ogaki-mh.jp/

お問い合わせ
 中日新聞広告局広告開発部
 TEL 052-221-0694
 FAX 052-212-0434
 プロジェクトリンクト事務局
 TEL 052-884-7831
 FAX 052-884-7833
 http://www.project-linked.jp/

プロジェクトリンクト

検索